

<今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 1章3～11節 >

1 信仰は天から降って来るものではない。

ここを読んでまず知らされることは、二千年前に最初の教会ができた時から「異なる教えを説く人々」(3)がいたという事実です。ですから、今の私たちも正しい信仰を学ばなければならないわけです。スキーはボーゲンで楽しめる程度できたらいいということはあり得ます。しかし信仰はそれとは違います。「神様からの恵み・憐み・平和」(2)を本当に知りたいなら、自己流で学ぶのではなく、そのために神様が用意して下さったものを通して学ばなければなりません。パウロとテモテはそのような神様が与えて下さった器であり、教会もそのために神様が設けて下さったものなのです。ですから、その教会で「異なる教え」が説かれることをパウロたちは止められなければならないのです。

2 正しい教えと異なる教えの違い — 愛と福音を目指しているか。

では、「異なる教え」と正しい教えの違いは何なのでしょう？ ここでは、その内容の違いより、それが生み出すものの違いが考えられています。パウロは、正しい教えは「清い心と正しい良心と純真な信仰とから生じる愛を目指すもの」(5)だと言います。異なる教えを説く人々の教えが教会員の間にそれ(愛)とは違う状態を起こしていたことがここから色々読み取れます(4-6)。また、7節以下に「律法」という言葉が出てきますが、9節以下の内容は神様が選びの民に与えられた十戒(出エジプト記 20:2-17)の特に後半、隣人に対する戒めを思い出させます。パウロは深刻なレベルで「異なる教え」を考えているのです。これに対してパウロが今日の個所の最後に、「今述べたことは、祝福に満ちた神の栄光の福音に一致しており、わたしはその福音をゆだねられています」(11)と語っています(「福音：gospel=good spell/news」 神様からの良き知らせ=イエス・キリストによって起こして下さった救いの出来事!)。聖書の神様の、特に恵みを深く知らされた人の言葉です。これが本当に分かっているか、とパウロは「異なる教えを説く人々」に問うているのです。パウロが彼らに語る言葉は厳し過ぎるでしょうか？ パウロは次の12節以下を読むと、「自分こそが罪人の代表であった、しかし神様の救いに与れた」と述べています。死を宣告された悪人もそう言って生かそうとされる神様なのです(エゼキエル書 33:11, 14-16)。